



片桐 哲 元女子大学長

に聴く

同志社と女子教育

父・片桐清治のことなど

——先生のお父さんは岩手県水沢の方で、同志社神学校で学ばれたんですね。

片桐 そうです。私は、同志社二世なんですよ。(笑)

——水沢といえますと、同志社第一回卒業生で、英才の誉れが高かった山崎為徳の名を思い出すのですが、同郷ですね。

片桐 山崎は、父の大的親友なんです。麩藩置県のとき、三万五千石の小藩だった水沢藩は、他の藩と統合されないで県になりましたが、県知事に相当する方が熊本から来られまして、その人が、水沢の町の青年を四人、給仕として採用しましたね、山崎と後藤新平(後の通信大臣・東京市長)、斎藤実(後の海軍大臣)、そして私の父と四人です。

山崎は選ばれて東京へ勉強に出ましたが、飽きたりなくて熊本洋学校で学び、卒業して東京開成学校(東大の前身)へ入学しましたが、中退して同志社へ来たのです。新島先生に見込まれてね、同志社へ残って教員になりました。その山崎為徳が夏期伝道で郷里の水沢へ来て演説をしたわけです。四人の

うち最後まで水沢に残っていた私の父が、山崎の演説を聞きまして大いに刺激を受けまして、それで父も同志社へ入学することになったわけです、町の有力な方がすすめても下さったようですが……。父はその時、小学校の校長をしていまして、明治十三年に二十五歳で入学しました。晩学だったわけです。当時は水沢から京都まで一カ月かかったそうです。入学してからは、アルバイトに同志社女学校で漢文を教えておりました。

——山崎は、明治十四年の十一月に、病気で亡くなったんですね。わずか二十四歳で……。

片桐 そうなんです。病気が重くなってからは新島先生のお宅へ引き取られましたね。私の父が泊り込みで看病をしたんです。そんなことで、新島先生や奥さんにも親しくしていただくようになりまして、明治十八年まで学びました。

——仙台の東華学校に関係されたとうかがっておりますが。

片桐 新島先生に、「伝道に行ったらよからう」と言われまして水沢へ帰っていたのですが、明治二十年に新島先生たちのお力で東

聴き手

河野 仁 昭

(社史史料編集所)



片桐 哲氏

華学校ができてまして、東北地方の事情がわかつている者がいいだろうということで、二十一年に、父は総幹事として東華学校へ移ったわけです。私が一歳のときです。

——五年ばかりで廃校になりますね。

片桐 そうです、国粹主義が台頭したからです。そして県立第一中学になりまして、私は三年生までそこで学びました。

### 同志社での学生生活

——先生が同志社へ入学されたのは、お父さんにすすめられたからですか。

片桐 父は自分が学んだ学校で子供も勉強させたかったわけです、明治三十七年に普通学校へ編入学いたしました。仙台から汽車で一昼夜かかりましたよ、当時急行はなくて各

駅停車でしたから……。父が、新島先生が亡くなられたときお葬式に間にあうようにというので、汽車や汽船、二人引きの人力車に乗りつぎまして三条大橋へ着くの、一週間かかったそうですが、「便利になったものだ」(笑)と言っていたのを覚えています。

——先生は、大塚節治先生と同級だったんですか。

片桐 いや、歳は大塚先生が一歳上でしたが、私より一年下でした。郷里で小学校の臨時雇の先生をしまして、志をたてて教員を止めて同志社へ来られたわけです。

——明治三十七年といえますと、下村孝太郎校長の時代ですか。

片桐 そうです。生徒が大変少ない時でしたね、全校で四〇〇人ぐらいだったでしょう(当時の男子部は三五九名)。丸太町の北は御所でしょう、そこから上賀茂までは市の郊外で、田舎でしたよ。同志社の前は御所、裏は相国寺の十丁四方の藪でしょう、同志社村なんです。

——村ですか。(笑)

片桐 村です。全寮制でした、寄宿舎があれこれにありまして。寺町二条あたりまで

本でも買いいに行くには、御所を通り抜けにゃならん、狸や犬がおりましてねえ、たいへん淋しい所でした。

——勉強する環境としてはいいわけですね。

片桐 そうです。新島先生はアメリカの大学で勉強をされ、諸外国の大学も視察してこられましたから、そのイメージがあったのだと思うんですね。むこうの大学は原っぱとか小高い山などがある所につくられていて、アーモストがそうでしょう、学校に関係した店などがぼつぼつあるだけの大学村ですからね。

——学生生活はどんな具合だったんですか。

片桐 同志社はキリスト教主義の学校ですからね。全寮制で、朝は彰栄館の鐘で起床しまして、七時半になりますとチャペルで礼拝がある。それから授業という具合で……。土曜日は体育日ということで授業がない、それで、食堂でもらったおにぎりを腰に下げて、草鞋ばきで比叡山とか愛宕山へ登ったり、琵琶湖へボートを漕ぎに行ったり、週休二日制だった(笑)。日曜日はお祈りでした。



(同志社東北人会)

左ヨリ 1 人目 速水藤助  
 4 // 日野真澄  
 5 // 今泉真幸  
 6 // 渡部清五郎  
 7 // 会沢清三  
 8 // 高橋皐  
 9 // 片桐哲

——瀬田でよく、水上運動会といって、クラス対抗のボート・レースなどを行ったようです。

片桐 ボート・レースの日は、女学校も休みでしたね、応援に行くわけです。

——兎狩りはなさいましたか。

片桐 やりました。上賀茂あたりが多かったですね。それから演説会、寄宿舎の集會室などで練習をやるわけです。応援する者やひやかす者がいましてねえ、なかなか盛んでした。そういう訓練をやるものだから、同社の学生は、考えをまとめて人の前で発表することがうまいと言われたものです。

——校外でもなさったんですか。

片桐 いや、寄宿舎が主でした。演説をして批評しあう、そういった訓練なんです。とにかく、同志社生活では、学生時代のことが一番つよく印象に残っております。

——九十一歳の今日、長い同志社生活を経験されて、その上でなお学生時代の印象がいちばん強いというのは、ちょっと意外な感じもしますし、古きよき時代という感じで、私たちにはうらやましい気がします。

授業とか、当時の先生方について何か…。

片桐 授業で印象に残っておりますことは、自学自習ということです。これが同志社の最も特色ある学風ですよ。生徒は、授業のある前に必ず予習をして行く。たとえば加藤延年先生の如きは、授業の前に生徒をつぎつぎに指名して質問をされるんですよ、予習してきたかどうか確かめるわけです。誰も答えられない箇所がありますと「ああ、ここが理解しにくいんだな」ということで、重点的に説明をされる。予習していつて答えると平常点をつけられましてね、それが九十点以上であれば期末試験を免除されました、エクスキューズと申しましてね。もっとよい成績をとりたい者は、受験をしてもいいわけですが。

——先生は、専門学校令による大学の神学部を卒業されましたね。

片桐 そうです、第一回の卒業生です。卒業前の一年間は角帽をかぶりましてよ。

——それまで、角帽ではなかったんですか。丸帽ですか。

片桐 帽子も服装も、なにも決まりがなかったんです。だから、体操の時間など、和着の者や、宣教師にもらったコートを着ておる者

や、袴をはいている者や、いろいろでした。

——同志社の生徒は、式典のときでも袴をはかないので有名だったそうですが……。

片桐 持っていないんですよ(笑)。貧乏な学生にとっては、まことに都合のよい学校でした。(笑)

——大学では、どういう先生に学ばれたんですか。

片桐 神学の日野真澄先生が校長でした。英語は今泉真幸先生で、たいへん几帳面ない先生でした。新約聖書は芦田慶治先生、旧約は宣教師のカープ先生。私は、大正二年に卒業しまして、アメリカのカリフォルニアのパークレー神学校で二年、それから東部のハートフォード神学校で五年ほど、結局七年ちかく留学しまして、主として旧約を学んで帰



デントン先生

りました。

#### 女子部の校長に就任した経緯

——大正九年に帰国されて、神学校(大学令による大学の文学部神学科になった年)の教授に就任されたわけですね。

片桐 そうです。「旧約聖書」の担当で……。

——昭和八年四月に、女子専門学校校長兼高等女学部部长に就任されたようですが、女子部へ移ることについて、何か理由があったわけですか。

片桐 大工原(銀太郎)総長から、頼まれてですね。私は女子教育の経験もないし、その準備もなにもないものですから、極力お断わりしたわけです。しかし、女子専門学校の志願者が減少してきており経営状態もよくなかったので、「片桐君、なんとか君が尽力して、女専をたてなおしてくれんか」と、総長に言われましたね。

それからもうひとつ、「君は、七年間もアメリカで勉強し、生活してきたんだから、アメリカ人の人情の機微がわかるだろう」とね、冗談まじりにですが、そういうことも言

われましてね。

——「デントン先生を頼む」、ということですか。

片桐 そうなんですよ(笑)。「君ならうまくやれるだろう」というわけで。ただし、神学部教授とかけもちでしたけれども……。

——じゃア、兼任ですか。

片桐 はい。神学部ではヘブライ語を教えておりました、女子部では聖書を担当しましたね。校長ですから、授業はあまりもたなくてもよかったです。まア、後になりました、女子部の仕事が忙しくなってきたものから、神学部のほうは講師というかたちになりましたが。

#### デントン先生のこと

——デントン先生は、どういふ方だったんですか。いろいろ聞きますが。

片桐 そりゃ、なかなかしつかりした偉い方でしたねえ、非常に鋭利なものがあ、判断もはっきりしておりました。内外の方から信望もあり、実際の範囲も広くて、寄付金集めなどで、女子部の経営を担っているという面がありましたからねえ。女傑でしたよ。

——デントン先生と考え方とか人間関係がうまくいきませんか、女子部にはいづらいついた問題もあつたと仄聞しておりますが……

片桐 そうです。うまくいなくて、止められた方もいました。私は、総長の意向もありましたので、レディ・ファーストで接するようには心掛けましたから、喜んで迎え入れて下さいましたが。

——学生生徒には、どう思われていたんでしょうか。

片桐 敵しかつたけれども、一生懸命努力されるので、教えられた人はみな、「よかったです」と感謝しております。何しろ、アメリカにおられたとき、すでに女子高等学校の校長までつとめられた方ですから、教育については自信をもっておられたわけです。

——日本語は話せたんですか。

片桐 いいえ、ほんの片言程度です。(笑)

「英語の教師が日本語を使うと、英語がくずれるから駄目だ」というお考えなんですよ。

「美しい英語を聞かせるのが、英語教師の義務なんだ」というわけです。何事につけ、平凡なことでは済まない方でした。

——太平洋戦争中も、デントン先生は帰米されなかったんですか。

片桐 「自分は日本の為に来たんだから、最後まで日本の為に尽したい」と申されましてね。戦争の状態が險悪になってきまして、政府から帰国するように言ってきた、すると、「日本の為に尽そうという者は、日本政府が要請するならそれには従わねばならん」というわけで帰国の決心をされたんです、最後の引揚げ船に乗ろうとね。ところが、当時はもう航海が危くて、船が出なかった。それで、やむを得ず日本に留まることになったわけです。

私なども、外務省や内務省へ出掛けましてね、「デントン先生は日本の為に生命を賭して尽したいと言っておられるのだから、政府としても配慮して欲しい」と頼んだのです。すると、政府にも国際的な視野をもったもの分かる役人がいまして、「そんな日本びいきの人なら大事にせいかん」というわけで、努力してくれたわけです。とくに内務省に分かる人がいましてね、敵しくはあつたけれども、保護してくれる面もあつたわけです。

——特高警察が、しょっちゅう監視してい

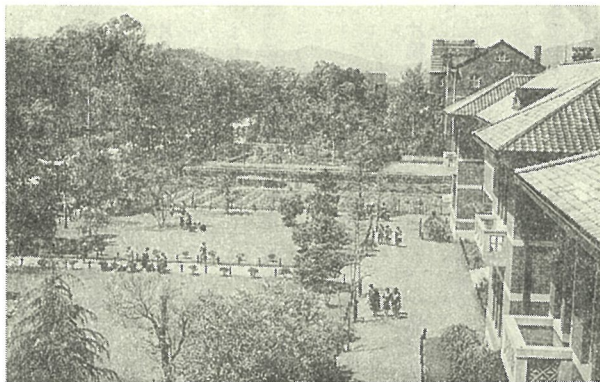
たそうですが。

片桐 そりゃもう、敵しい監視をうけましてね、「敵国人が教壇に立つようなことは、もつてのほかだ」というわけで、授業を禁止されたんです。私たちも、「先生、なにもしていただかなくて結構ですから、ただお祈りだけしてして下さい」と言いふくめ、また、励ましもしましてね。(同志社は昭和十六年十二月八日付でデントンに休職を命じた。帰国した外人教師については解職の処置をとつた)。

#### 女子教育について

——女子部の教育で、いちばん力を入れたのはどういう点でしたか。

片桐 私は、女子教育については、なんの経験も知識もない。ただ、同志社はキリスト教主義の学校ですから、女子にキリスト教主義の精神教育を行ないたいという、そのことに使命を感じました。たとえば毎朝、欠かさず礼拝をするとか、授業では「聖書」を必修科目にするとか、生活の場でキリスト教の精神をもった生活をするように訓練するとか、まあ、そういうことですな。



戦前の女子部キャンパス

朝の礼拝は、校長が中心になっており  
りになられたわけですか。

片桐 はい、クリスチャンの先生にもお手  
伝いしていただきましてね。後には「聖書」  
を教えていただく先生が必要ほど学生生徒  
の数が多くなりましたから、宗教主任の先生  
がやって下さったんですが、もとは校長が宗

教主任のようなことをしたわけです。

——先生は寮生活をたいへん重要視なさっ  
た、とうかがっておりますが。

片桐 キリスト教的な精神をもった生活訓  
練をやるには、寄宿舎がいちばいいわけで  
すからね。私も一週間に一度ぐらい各寮をま  
わりまして、寮の行事に参加したり、説教し  
たりして、学生生徒の訓育に当たりました。

私が校長に就任した当時は、学内に三寮、学  
外に二寮ありました。

男子部のほうは、もともと全寮制だったん  
ですが経営難などで、寮を廃止したり、教室  
に転用したりしましたが、女子部はいまでも  
持ちつづけております。

——新島先生の自責の筈が行なわれた第二  
寮は、女子部へ移して新島館と呼んでいたよ  
うですが、あの建物も寄宿舎として使われて  
いたんですか。

片桐 最初は寄宿舎でしたが、私が就任し  
ました頃は、化学の実験室など、教室として  
使われておりました。小さい建物で、収容人  
員もわずかでしたから……。今は田辺校地へ  
移されています。

——舎監は、やはりクリスチャンを……。

片桐 そうです、それが第一条件です。生  
徒と寝食を共にして親しく指導していただ  
ける方でないとい具合がわるいですから。

——先生が校長に就任された頃は、寮生と  
通学生では、寮生のほうが人数は多かったん  
でしょうか。

片桐 はい、多かったですね。だんだん学  
生生徒の数がふえてきて、通学生のほうが多  
くなりましたが。通学生は、みな自宅から  
で、下宿は許可しないことにしていました。

#### 戦時下の女子部

——キリスト教主義の精神教育に力を入れ  
てこられまして、やがて戦争になるわけが  
が、戦争中は先生が望まれるような教育は、  
むずかしかったのではないかと思います。

片桐 男子部には軍事教官が配属されてお  
りましたが、女子部には軍人はいませんでした  
からね、比較的やりやすかったわけです。  
それでも、徐々に窮屈になりました。

——「聖書」の授業は、戦時中もされたん  
ですか。

片桐 それはやりました。聖書を教えたり  
礼拝をさせたりするものですから、文部省が

定めた高等女学校にはなれなくて、高等女学部といったんですよ。各種学校だったわけなんです。

戦争が激しくなってきた、私よびだされましてね、「そんなに頑張らないで、文部省の規則に従って、高等女学校にしたらどうだ」と、府庁の学務課で言われました。

「いや、各種学校で結構です、同志社はキリスト教主義の教育をやるということでつくれた学校ですから、設立の趣旨に反するような教育はできません」と、私申しまして応じなかつたわけです。ただ、私は女子専門学校校長でもありましたから、高等女学部は府庁の管轄でしたが女専は直接文部省の監督をうけることになっておりまして、府庁の学務課では、私には手が届かないところがあつた。それで、教頭の未光（信三）先生を呼びつけるわけです。しかし、未光先生も、「同志社がキリスト教主義の教育を止めたら、学校の存在の意味がなくなります」と申しましてね、勧告を受け容れなかつた。ですから、それはもう、いろんないやがらせをさせましてねえ。

——未光教頭は、苦しい立場に立たされた

わけですね。

片桐 そうです。

——文部省から、女専の校長に、直接圧力をかけてくるといったことはなかつたんですか。

片桐 そりゃありましたかね、文部省にも国際的な視野をもったもの分る役人もおりまして、私、呼ばれまして、「同志社はキリスト教主義の人格教育をやるためにつくれた学校なんです。国家の方針に添わない点があれば改めますが、設立の趣旨に反するようなことはできません」と、つよく申し上げます、一応はそれで通してくれるわけです。しかし、好感は持たれませんでした、始終刑事がつきまといましたしねえ。

——デントン・ハウスには、米国人デントン先生がおられますし……。

片桐 そうそう、刑事がきては、どのようになっているのかと訊ねるわけです。教壇に立たせたりしとりやせんか、というようなことですね。

——寄宿舎はどうだったんですか。

片桐 寄宿舎までは府庁の監督の手が延びませんでしたから、比較的自由でした。

——いろいろ苦心があって、しかし、昭和二十年四月から、ついに高等女学校になったわけですね。当時としてはやむを得ないことではなかつたかと思うのです。（同志社中学は、昭和十八年四月より「中等学校令」による中学校を設置）女専の英文科の定員は、昭和十九年四月から減らさねばならなくなつたんですね。

片桐 男子部については、文科系の学部は廃止するように、政府がやかましく言ってきました。（教育に関する戦時非常措置方策「昭和18・12」）男子は兵隊にとられるわけですよ、徴兵猶予の特典もなくなりましたね。女子の場合はそこまで厳しくはなかつたわけで、「戦争中であればこそ、英語がますます必要なんだ」と、私つよく主張しまして、英文科を残したんです。授業もやりました。大学の英文科は廃止になりましたので、一部の英語の先生に来ていただきましてね。

片桐 男子部にくらべるとまだやりやすかつたわけですよ。戦争中は同志社の伝統保存の機関になったのです。

## 女子大学の設立

— そういう苦しい暗黒の時代があつて、戦後、昭和二十四年四月に四年制の新制女子大学になるわけですね。共学の神・文・法・経済の四学部は、二十三年に新制大学になっておりますが、女子大が一年おくれた理由は？

片桐 大学設置基準も厳しかったわけですが、今後の新しい時代の女子教育はいかにあるべきかということで、時間をかけてまして研究したのです。ヒバート先生、クラップ先生、グラント先生、滝山（徳三）先生、加藤さだ先生、それから私などが委員になりました。私がかねてから音楽部を設けたいと思つていたのですが、急にそういう部を新設することはむずかしい問題もありまして。

— 委員会の話題になつたことではなにか。

片桐 音楽部のほかに、科目では「人間関係学」というのを置いてはどうか、というようなことを話し合いました。新しい時代に生きる女性としては、政治や経済にも通じている必要があるというわけで、そういう教育をする試みの一環としましてね。

— 女子専門学校から女子大学になって、

とくに変つたことは何ですか。

片桐 いや、あまり大きな変化はなかったんです、女専の延長のようなものですよ。同志社の学校制度は、新島先生がアメリカで学んで来られてつくられた制度が、伝統として残つておりました。一般教養つまりリベラル・アーツですね。明治期には中学校を普通学校と申しましたが、「普通」つまり一般教育を施すカレッジだったわけで、女子専門学校が明治の終りに出来ましたときも、設立の中心になつて尽力された松本亦太郎先生などが、その伝統を生かされたのです。ですから、戦後になつてGHQやアメリカの教育視察団が同志社女子専門学校の学科制度をみましてね、「こりゃ、いい」と言うわけですが、むこうの制度とよく似ているわけです。一般教育はなにも新制大学になつてからのものではなくて、もともとリベラル・アーツに力を注いでおりましたし、一般教育のレベルが高かつたのです。先日（昭和五十三年十一月二十九日）同志社名誉文化博士を授与された田辺繁子さんなどは、女専の卒業生で、同志社大学が試みとして女子の入学を許可した第一回目の入学者ですからね。キリスト教主義によ

る人格教育と一般教養の重視、これが同志社の伝統なんです。新制になりましたも、当然そうです。教員の入れ替えなど、ほとんどせずに済みました。

## これからの同志社への希望

— ヒバート学長の後をうけて、昭和二十五年三月に先生は女子大学長に就任され、定年ご退職までお勤めになられたわけですが、これからの同志社について何か。

片桐 いま、同志社の学生生徒数は三万人でしょう、同志社村が街になつた（笑）。来年、田辺に国際高校ができるそうですが、私はそういう小規模の学校を、全国のあちこちにつくるといふと思いますね、昔の東華学校のような。日野真澄教授は東華学校出身で、同志社へ来ることを「本山参り」だと申しておつたですよ。推薦で同志社へ入学ができる全寮制のキリスト教主義の学校を、各地につくればいいと思ひますね。

— 九十一歳とはとても思えない若さで、たいへんお元氣そうですが、どうぞいつまでもお元氣でお過ごし下さい。長時間ありがとうございます。

（昭和五十四年一月二十五日 片桐邸で収録）